



そこが知りたい
 ぐらしの金融知識

子どもに求める金融リテラシー
 金融トラブルへの懸念も背景に

子どもに対するお金の教育は、元より非常に大切なことですが、電子決済の浸透や家庭環境の変化などに伴い、

その必要性がますます高まっています。

現金中心だった日本の支払い方法は、クレジットカード、電子マネー、QRコード決済(注)などのキャッシュレス決済へとシフトしています。ま

子どもにどう教えればいい？
 家庭で行う金融教育の基本

キャッシュレス決済やネットショッピングの浸透、成年年齢の引き下げなど、お金をめぐる環境にさまざまな変化が起きている今、これまで以上に子どもへの金融教育が求められる時代となりました。そこで今回は、家庭でどのように金融教育を進めるとよいのか、考えてみましょう。

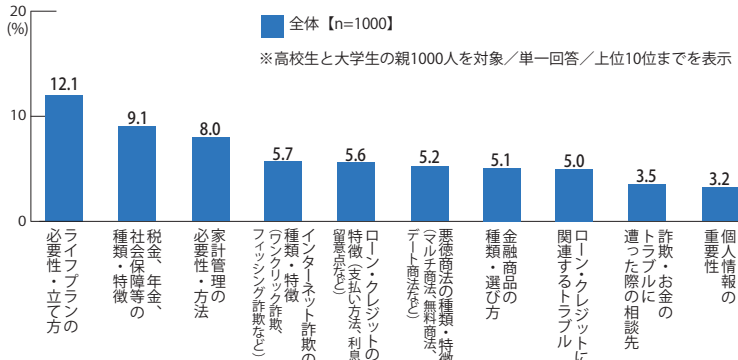
た、働き方も多様化し、時間や場所を問わず買える物ができるネットショッピングの利用が増えています。

このように支払いや買い物物が便利になる一方で、子どもが現金のやりとりを目にする機会が減り、金銭感覚を養うことが以前より難しくなっているのが実情です。また、若年層のお金のトラブルも増加しています。2022年4月に成年年齢が引き下げられ、18歳になると親権者の同意がなくても契約ができるようになりました。

高校生と大学生の親1000人を対象にした「金融リテラシーと家庭の金融教育に関する調査2023」によると、子どもに最も身につけてほしいと思う金融リテラシー1位は「ライフプランの必要性・立て方」ですが、4位以下は「インターネット詐欺の種類・特徴」、「ローン・クレジットの特徴」、「悪徳商法の種類・特徴」となっており、

若年層のお金のトラブルが増加する中で、きちんとした知識を持つてほしいという親の意向が見て取れます【図表1】。

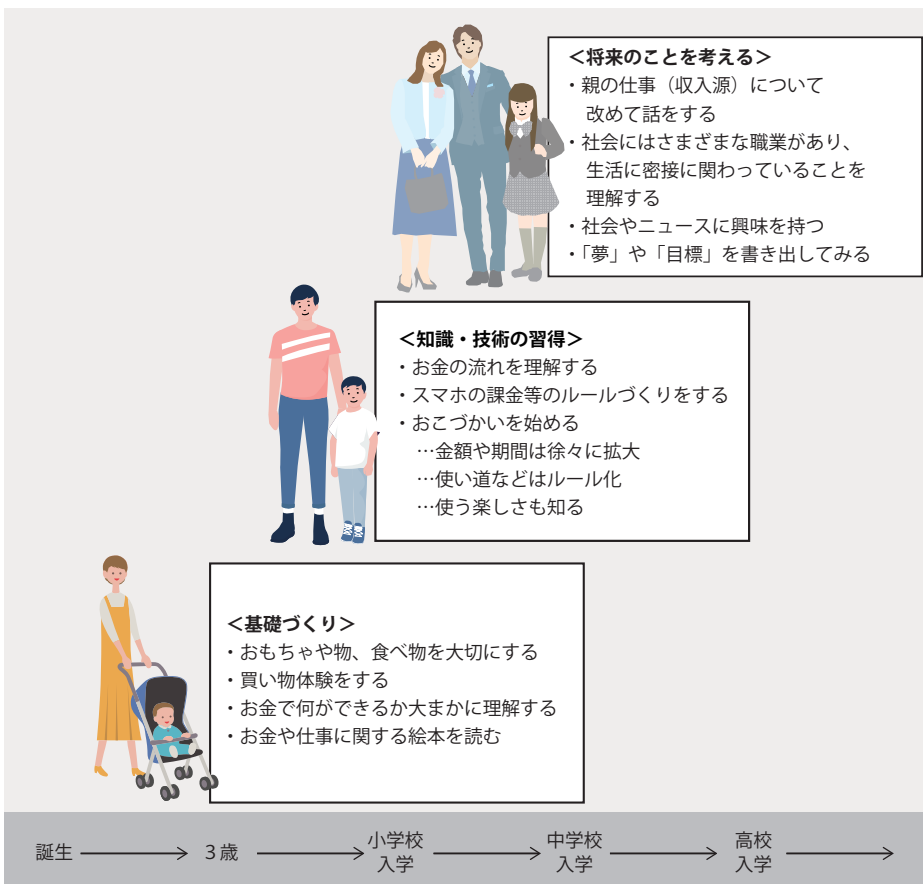
【図表1】子どもに身につけてほしいと思う金融リテラシーの内容



(出所) SMBCコンシューマーファイナンス「金融リテラシーと家庭の金融教育に関する調査2023」を基に監修者作成

(注) QRコードは株式会社デンソーウェブの登録商標です

【図表2】金融教育は成長や理解力に応じて段階的に行う



(出所) 監修者作成

家庭での子どもの金融教育は成長や理解力に応じて段階的に

学校での金融教育に関しては、小学校は2020年度から、中学校は2021年度から、高等学校は2022年度から新しい学習指導要領が実施されており、金融教育の内容はより拡充されました。とくに高校では、

資産形成の視点にも触れながら、生涯を見通した経済計画の重要性について理解できるようにする、との内容が盛り込まれています。

一方、学校任せにすることなく、家庭で保護者が子どもに教えていくことから小学校の低学年くらいにかけては、おもちゃや物を大切にすること、保護

者や周囲の人への感謝の気持ちを持つ、約束を守るといった基本的な行動や態度を養うことが、金融教育の第一段階です。

なお、ここでは小学校低学年、中学年など年齢層毎に区切ってご紹介していきますが、子どもの成長や理解力に合わせて順次伝えていけばよいでしょう【図表2】。

小学校低学年からはお金の流れを理解してもいい

第一段階での基礎づくりが終わったら、次は大まかなお金の流れを理解してもらいましょう。

子どもが現金に接する機会が減り、金銭感覚が希薄化する懸念についてお伝えしましたが、実際に、「お金はATMからいくらでも引き出せる」と思い込んでしまっている子どももいるようです。また、店舗で親が買い物をするようになったら、子どもが「お店で買うとお金が減るから、ネットで買ったほうがいいよ」と言ったという話もあります。

このように、小学校低学年から中学年の子どものは、裏側の仕組みにまで理解が及ばず、目の前で起きていることを鵜呑みにする傾向があります。小学校に入ったところから、お金はどこから

得られ、どう使われるのかなどの流れを、少しずつ話していくのが金融教育の次のステップといえます。

まずは、子どもと一緒に買い物をして、大人がお金を支払う場面を子どもが見る機会を増やすとよいでしょう。それとともに、①銀行にお金が入るまでの過程（親や保護者が働いた対価が給料である）、②お金を支払うということの意味（ネットショッピングでもお金は減っている）、③現金とクレジットカードの違い、といった基本的なことを説明していくとよいでしょう。その際、子ども向けのお金の絵本やアニメなどを活用するのも一つの方法です。

中には、「子どもには、あまりお金の話はしたくない」と無意識に思っている人がいるかもしれません。しかし、お金の価値がわからないことが、後に大きなトラブルにつながる可能性もあります。たとえば、子どもがスマホのアプリに数十万円単位で高額課金し、あとで請求を見た保護者が驚くといった例は少なくありません。

また、お金のトラブルを恐れて、子どもにスマホを持たせざるをためらう、お金を一切持たせないといった事例も耳にします。しかし、気づかない内にキャッシュレス決済で少し使い過ぎてしまった、といった「小さな失敗」

を、早い時期に子ども自らが経験することが、その後の金融行動の大きな糧となることもあります。大人が子どもの失敗を過度に恐れず、少しずつお金の経験をさせていく勇氣を持つことも大事です。

小学校中学年から 一定金額を管理させてみる

小学校中学年ごろになると、子どもたちだけで遊びに出かけたり、塾や習い事に行ったりするようになります。友達との関係性が強くなり、趣味や遊びで影響を受けたり、友達の持っているものを自分も欲しがったりといった行動が目立ってくる時期でもありません。

だからこそ、「たとえ仲の良い友達同士でも、お金の貸し借りや、おご



たりおごられたりはNG」と伝えることが大切。友達との関係が悪くなったり、相手のお金を当てにする癖がついてしまうことも考えられます。

また、この時期からおこづかいを渡し、子どもがお金を管理する能力を磨いていきましょう。自分で使えるお金を手に入れて、お金を使うことの楽しさを学ぶのもよい経験ですが、ただ使うだけでは金銭感覚を養うことはできません。この時期から、「使つてよいお金には限りがあること」を理解させていくことが大切です。今、自分が買いたいと思っているものは本当に必要なものなのか、友達が持っているからという理由で、必要のないものを欲しがっているだけではないのか、といった「ニーズとウォンツ」の関係も教えていくとよいでしょう。

おこづかいで大切なのは、計画的にお金を使う方法を知ってもらうことです。そのためにおすすめしたいのは、「貯めるお金」、「使うお金」、「人のために使うお金」、「増やすお金」と、4つの貯金箱にお金を振り分けるという方法です【図表3】。貯金箱はジヤムの空き瓶などで手作りしたものが十分です。

おこづかいの一部を残して「貯め

るお金」に振り分け、コツコツ貯めていけば1カ月のおこづかいでは買えないものも手に入れることができます。本当に必要なものや欲しいものは、「使うお金」に振り分けて買うとよいでしょう。「人のために使うお金」は、自分以外の誰かのためにお金を使うことの大切さを学ぶことにつながります。「増やすお金」については、お金は増やすこともできるということを教え、本人が興味を持てば、保護者の協力のもと利息を付けて渡してあげるとよいでしょう。このように振り分けて使うことは、大人になってからもお金の管理に活かすことができます。

また、おこづかいを渡す際には、お金をどう使う予定か子どもと話し合い、おこづかい帳を使って記録し、月末に振り返りを行うと、管理能力が身につくようになります。

おこづかいの渡し方については、毎月一定額を渡す定額制、手伝いをしたときに渡す報酬制、両方をミックスにするといった方法があります。家庭の方針に沿って選べばよいでしょう。おこづかいではなく都度お金を渡す場合は、「半年に渡せるお金は〇〇円まで」など、限度額を設けて本人に管理してもらうのもよい

【図表3】「4つの貯金箱」でお金を管理する

貯めるお金

少ないおこづかいでもコツコツ貯めると大きな金額になります。将来のため、いざというときのため、大きな買い物をするためにも貯金をするのは大切です。

使うお金

お菓子や飲み物、おもちゃ、文房具など、自分の欲しいものや必要なものを買うお金です。やみくもに使うのではなく、「ニーズとウォンツ」を意識して使うようにしましょう。

人のために使うお金

社会は支え合いで成り立っています。自分も社会の一員であることを学ぶため、家族や友人へプレゼントをして日ごろの感謝を伝えたり、寄付や募金などにお金を回したりしてみましよう。

増やすお金

お金を預けたり投資に回すと、増やすことができます。お年玉などまとまったお金をもたらしたときに、保護者が一定期間預かり、利息を付けて子どもに戻す方法も、仕組みを理解するのに役立ちます。

(出所) 監修者作成

子ども向けのお金のコンテンツを活用しましょう！

知るぽるとには、子ども向けコンテンツも多数用意されています。
家庭で子どもに教える際にぜひ活用してみてください。

★キッズページ

園児や小学生向けのページ。人気動画「ホシガリ姫の冒険」や楽しみながら学べる「おかねのね」「こどもクイズ」などが掲載されています。



★作文・小論文コンクール

中学生を対象とした「おかねの作文コンクール」、高校生を対象とした「高校生小論文コンクール」の入賞作品が紹介されています。

ご家庭でも役立つ金融教育のヒントが見つかります。



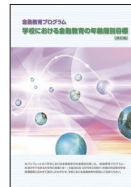
★動画講座「マネビタ」・「18歳までに学ぶ 契約の知恵」

高校生くらいになったら、これらの教材を子どもに紹介して、成人になる前に自分で見る・読むように勧めるとよいでしょう。短時間で基本的な知識を学ぶことができます。



★「学校における金融教育の年齢層別目標」

家庭で子どもにお金の教育をする前提として、学校ではどのようなことが教えられているか、保護者として知っておくのはいかがでしょうか。



でしょう。

おこづかいの管理がある程度身につくまでは、増減を目で確認できる現金で渡すほうがおすすめです。キャッシュレスで渡す場合は、現金をチャージす

るところを子どもに見せ、その後は定期的に残高などを確認するようにしましょう。QRコード決済であれば、基本的に残高や利用履歴はいつでも確認できますし、電子マネーの残高や利用

履歴を確認できるアプリもあります。

中学生以上の子どもには 生活費の実態を理解してもらう

中学生以上になったら、実際に生活していくのにいくらお金がかかるのかといったことを理解するステップに入ります。場合によっては、家計の収支をざっくり話すのもよいかもしれません。家計の費目に分けて、食費が7万円、住居費が10万円など、大体どのくらいお金がかかるのかを話し合ってみます。入ってくるお金（収入）に限りがある以上、出ていくお金（支出）もそれに合わせる必要があることを、具体的な数字で理解してもらうのです。

親の仕事（収入源）や、世の中にはいろいろな職業があることを話すことは、社会や将来に目を向ける良い機会になります。とくに高校生になったら、働いてお金を稼ぐこと、稼いだお金を生活や自分が手に入れたいもののために使うことを、より具体的にイメージできるようにするとよいでしょう。

このころには、アルバイトをして収入を得る子どもも出てくるでしょう。労働を通してお金の価値を再認識する機会になり、社会勉強にもなります。ただし学生の間は学業が優先なので、時間の使い方については家庭内であら

かじめよく話をしましょう。

大学進学を考えている家庭では、「奨学金」についても調べてみましょう。奨学金は子ども自身の借金になるため、返済の見通しも含め、子どもとよく話し合うことが大事ですが、高校時代の成績などにより、無利子もしくは返済不要の奨学金を利用できる可能性もあります。

家庭での金融教育は、子どもの人生に大きな影響を与えます。計画的にお金を準備することで、夢や目標を実現できるということが学べます。また、お金の大切さを知ること、自分が経済的に自立すること、充実した暮らしを送ることのイメージも湧きやすくなるでしょう。それが、その後の職業選択やキャリア形成にもつながっていきます。お金の実体が見えにくくなっていく時代だからこそ、早くから子どもへの金融教育を進めていくことが大切です。

そが知りたい

くらしの金融知識

監修

八木陽子（やぎ・ようこ）

一級ファイナンシャルプランナー技能士、CFP®、キャリアカウンセラー（CDA）、キャリアコンサルタント（国家資格）。出版社勤務を経て独立後、マネー記事の執筆やプロデューサー、セミナーなどの仕事を手がける。2005年に親子でお金と仕事を学ぶ団体「キッズ・マネー・ステーション」を設立。